

史遊会通信

NO. 192
平成22年
11月7日
発行

事務局
03-3712-0651
下山田方

自由執筆
東北の鉄

中山 喬史

昭和一桁生れの私は、ご縁というものを強く感じるようになった。特に史遊会会員の方々のご著書を通じてのご縁である。

最近私は鉱山研究会に会員として加入したが、其のきっかけは、三戸岡さんのご著書『金原明善の一生』であった。ある会合で一緒にした女性鉱山学者が金原家縁の方で、彼女から入会を強く勧められたのである。丁度鉄の勉強に着手したいと考えていたところでもあり、入会した。

話は変わるが「史遊会通信」186号に松川さんが自由執筆「鉱都、足尾の光と影」を掲載されているが、其の中に出て来る案内役の小野崎敏氏は日鉄鉱業取締役から釜

石鉱山(株)社長を歴任された方で、鉱山研究会のメンバーであると共に、産業考古学会でも活躍されている方である。

同氏の提唱で今年七月中旬、釜石を訪問、地中三〇〇メートルまで入り、発掘現場を見学、更に幕末の溶鉱炉跡を実地見聞したり、鉄の歴史館を訪問したりして、幾つかの新知見を得る事ができたので、それについて若干述べさせていただく。

結論を言えば、近代製鉄の始まりは、東北釜石周辺で起こったことは議論の余地が無く、その後の八幡製鉄所の稼動成功は、釜石で技術を磨いたものを継承しているからなのである。更に小生が眼を留めたのは、「鉄の歴史館概要」六頁「東北の鉄文化」

で、「東北地方にも、古墳時代から奈良時代ごろにはすぐれた鉄器文化や精錬技術が普及していたことがうかがえ、桓武天皇時代の養老令による『令義解』や『令集解』

例会のお知らせ

◎ 11月例会

日時 平成22年11月24日(水)

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 新井宏氏

テーマ「原稿作成とインターネット」

自由執筆は会員及び友の会員による

「今年感動した三冊の本」

締切りは11月30日

字数は19字75行以内(氏名・題を含む)

◎ 12月忘年会

日時 平成22年12月8日(水)

午後6時～8時

会場 学士会館

会費 七千円

出欠のご返事は同封のはがきにて

11月24日必着でお願いします。

自由執筆は森下征二・千坂精一・

佐藤健一の諸氏 〆切 12月31日

にある東北地方での製鉄禁止令は、多分に有名無実であったことがわかる」という記事であった。内容は「令義解卷九・関市令第27」弓箭条「凡弓箭兵器、並不得與諸蕃市易。其東迎北迎、不得置鉄冶。」、「令集解後編、関市令第27」弓箭条「古記云。東迎北迎。謂陸奥出羽等国也。穴云。禁置鉄冶。不合知作鉄之術耳。全物推可知耳。」である。

ここで思い出したのが柴田さんのご著書『全国別所地名事典』で、その上巻三三二頁下欄に記載されていた蘇武氏の話に眼が止まった。前漢の武帝(BC140~BC87)~昭帝(BC86~BC74)の時代に匈奴の捕虜となり、許されて長安に戻ったが居場所がなく、日本列島に亡命した蘇武氏の話である。四十年前、四世帯の家族寮で家族ぐるみの付き合いをさせていただいた蘇武家縁の人物が念頭に浮かび、当該箇所のコピーを同封の上、手紙を送ったところ、部厚い返事が到着した。記事の内容は間違いないと詳しい説明がなされていた。

中国では貴族が居を構える時、様々な分野の専門工人を帯同している。このことを考えると、紀元前の時代に既に、東北に製

鉄関連の鉱山師、専門工人が入っていたことが考えられ、鉄の純度70%の餅鉄が露頭に豊富に存在し、燃料である木炭、媒熔剤として使用する石灰があり、それに技術も保有していたのであるから、渡来した蘇武氏の集団は、先ず鉄を製錬することにより生計を立てた事は十分に考えられるもので

自由執筆

王子の乱

新井 宏

北朝鮮の「金王朝」の三代世襲に金正日の三男の金正恩が決った。中国が不承不承、結局は「勅許」したからである。実情は、それほど中国が北朝鮮の崩壊を恐れているからであろう。いま北朝鮮が崩壊したら、最も困るのは中国と韓国であり、中国では難民によって、ただでさえ不安定な少数民族問題に火をつけかねないし、韓国でもドイツ統一とは比較にならない負担が生じ、経済が崩壊しかねない。試算によれば、国民総生産の数倍の負担が生じ、冷静に考え

あると思料した。

日本列島における鉄の生産は、近代が東北から始まっただけでなく、先ず弥生時代、東北で開始され、それが徐々に東日本に伝わる、其の一方で、朝鮮半島の鉄も西日本に交易品としてもたらされたと考えられる方が整合性に富むと考えた次第である。

れば、誰が北朝鮮の崩壊を望むであろう。

そもそも、共産国家の中国が世襲に賛成するのが異常である。しかも中国在住で御しやすい長男の金正男を差し置いて、三男の正恩が世襲を認めるのも異様である。

それは、朝鮮の歴史を見れば明らかかなように、中国が李朝の王を「勅許」する際には「長幼の序」が重要な要素になっていたからである。

そんなことを何かに書いてみたいと思っていたところに飛び込んだのが、日本のテレビ局による金正男の衝撃的なインタビューである。金正男は「個人的には三代世襲に反対」と述べた上に、彼の祖国について、正式な名称「共和国」を使わずに「北朝鮮」と呼び捨て、危険水位を超えた

発言をしたのである。

これを見て、韓国メディアは早速「平壤版王子の乱」と報道した。李氏朝鮮五百年の歴史は、政争と政権交代に伴う肅清の明け暮れであったが、そこではしばしば「王子の乱」と称する兄弟間の殺戮が行われていた。最も有名なのは、三代太宗が兄弟三名を殺害する等によって王位篡奪した「第一次王子の乱」と「第二次王子の乱」であるが、「政争」が王子間の争いを生む構造は、李朝の不可避的なパターンでもあった。

「平壤版王子の乱」とは「金正男一派への襲撃事件」、すなわち、昨年四月、金正恩が情報機関の国家安全保衛部要員を動員して、金正男の平壤滞在時の隠れ家を襲撃した事件のことである。これまで、密かに語られていたが、日本のテレビ局のインタビューをきっかけとして、これが一斉に報道されたのである。

その上、昨年八月には金正日が、直接胡錦濤主席に中国滞在中の金正男の身辺保護を依頼していたという衝撃的なニュースまで付け加えられている。これでは、中国が金正恩の承認を渋ったのは無理もない。それにもかかわらず、中国が世襲に同意した

のは、それほど中国が北朝鮮の崩壊を恐れていたことのに証左でもあろう。

歴史的に見ると、李朝の王位継承は、原則として中国王朝の「勅許」を得て初めて、その正当性が保証されていた。クーデターによる政権篡奪や、長幼の序を乱した王位継承で、最も苦心したのが、中国王朝から「勅許」を得ることであった。そのため、金正日が二回も中国詣でをしたのだと見れば歴史は理解しやすい。

自由執筆

旅の思い出

フィレンツェ・エルバ島・ローマへ

島津 隆子

まるでこの夏の猛暑から逃げ出すようにイタリアへの十日間の旅は始まった。娘と二人旅だ。ローマから飛行機を乗り継ぎ、着いた先はルネッサンス発祥の地といわれるフィレンツェ。

過去に訪れた時、印象的だったヴェッキオ橋に行く。橋の上に並ぶ貴金属と宝石店

それにしても、金正恩が金正男一派を襲撃したということは、正男がマカオや香港で交易などに従事し、北朝鮮にとって侮れない力を持っていることを意味している。事実、中国には正男の側近も健在であり、中国政府内にも正男支持派がいるという。さすがに、中国にいる正男には正恩も手出しは出来ないであろうが、何が起こるかわからないのが、北朝鮮である。

をウインドショッピングしながら、その先に位置するウッフィツィ美術館に行くつもりだ。

しかし、所狭しと並べられた店々の宝石に目潰しを食らった趣の橋の上を通り過ぎ、人の流

れに交じり、すぐ先の美術館に向う途中で事件は起きた。

背負ったリュックのジッパーが開く微かな音と、触られている感触があった。咄嗟に振り返った私の目に映じたのは、二十歳代の美しい女性が手にしている私の財布だった。「それ、私の財布よ！」私が叫んだ

瞬間、女性は財布を地面に投げ捨てたのだ。すると、別の女性がその財布を拾い上げた。みると妙齡な美女である。私は思わず渾身の力で女性の手から財布を奪い取り、「これ、私の財布よ！」と両手で抱きしめていた。

気がつくとき、人々に囲まれて、格好の見世物になっているみたいだ。その場では、羞恥心より安堵感の方が強かったが、後で考えると、「盗られてなるものか！」という毅然たる闘争心と防衛本能の発露だったような気がする。しかし、ただ単に欲深がなせる業と、一笑に付されてしまうかもしれない。それにしても好きなイタリアで美女のスリに遭遇とは、まったく胆を潰した。こうして着いた美術館のカラヴァッジョ展で代表作の不気味な「バックカス」を観る。彼の生き方と画風の落差が観る者を惹きつけるのか、なかなかの人気ときく。その他、ラファエッロの「小椅子の聖母」「大公の聖母」「ペールの女」などをゆっくり観賞した。

翌日はフィレンツェから三時間ほどかけ、ピオンビーノという港町へ行き、フェリーでエルバ島の港に着いた。ここからタクシ

ーで曲がりくねった山道を十五分ほど走り、やっと予定のホテル・ビオドラに落ち着く。思ったより山深く大きな島である。いかにもリゾート地らしい瀟洒なホテルのテラスからは、湾になった岬が遙かに望める。船影や海鳥を浮かべた地中海が穏やかに広がって、眼下にはアールが輝いている。

島での二日目、ホテルから少し離れた所に残る、ナポレオンの住居と夏のために建てたという別荘に行った。住居の執務室の本箱には立派な蔵書が並び、寝室の黄金色のベッドがかつての栄華を偲ぼせる。

しかし、「予の辞典に不可能の文字はない」と豪語していたさしものナポレオンもロシア遠征がたたり衰退してゆく。そして、降伏してこのエルバ島に流されたが、島からの脱出に成功。再度、皇帝に返り咲く。しかし、連合軍に捕われの身となり、大西洋の孤島セント・ヘレナに流されて終った。この間、わずかに百日余りだったので、「百日天下」といわれたそうだ。

旅の終りの三日間、晩夏のローマを満喫。この夏の炎暑の湯きが潤うよい旅であった。

事務局だより

▽今月の講演テーマはパソコンやインターネットに疎い私にとってもちょっと興味のあるお話で、大いに期待しているところですよ。(下山田)

▽NHKテレビ1「歴史秘話ヒストリア」江戸の数学は世界一?」(11/3)で、久し振りに佐藤健一さんのお顔を拜見致しました。江戸の和算が見直されるといいなと思った次第。

▽11/3付の読売新聞朝刊の「旧石器捏造10年」(下)の記事の中で、清岡央氏が新井宏氏の「日本では考古学者と自然科学者の議論が成り立っていない」という言葉を取り上げていました。「理系教育を欠く考古学者」、納得です。

▽早いもので、次回はもう忘年会です。皆さまぜひご出席ください。

▽年末と言えば自由執筆は恒例の「今年感動した三冊の本」です。感動とまではいなくても、ちょっと面白かった、みんなに紹介したいという本の感想文をお寄せください。友の会の方々もぜひどうぞ。